

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「浩一、起きる時間よー」

——十月。

なんだか今日は、起きるのがちよつとつらい。転校してから一か月、気を張って一度も休まずに学校に行っていたせいもあるかもしれない。

でも風邪をひいたとか、具合が悪いわけではなかった。なんとなく、いつもより少し気分が悪い、そんな感じだ。

前の学校にいたころは、こんなときどうしていただろうか。

もしかしたら休んでいたんだっけ……。

じゃあどうする？ 今日……。

「浩、どうしたの？ ちゃんと学校行けるの？」

お母さんが、少しだけ心配そうに、もう一度声をかけてくる。

「うーん……」

一瞬考えてから、すぐに起き上がった。

「……行ける！」

* トクベツキューカを使おうかと思ったけど、やっぱりや

めた。

こんなときに大切な一日を使うのは、もったいない。だって、一度使ったら終わりなのだ。これからどんな日が来るかわからないのなら、その日に備えたい。

もちろん本当に風邪をひいたりとか、体調を崩したりしたら、トクベツキューカとは関係なく休むことができるけど、今はまだ転校してきて間もないものもあるし、なるべく学校を休みたくなかった。

「そしたら早く支度してね、ご飯も食べて、忘れ物とかもないように」

「あっ……」

そう言われて、あることを思い出した。忘れ物というか、忘れていたことがあった。

今日は漢字の小テストの日だ。それなのに宿題をまだやっていない。

このままだと、テストの結果もまずいことになる。

どうしよう。やっぱりトクベツキューカを使って、学校を休もうかな……。

そしたら漢字の小テストも、ひとまず今日は受けなくて済むし……。

「浩、またどうしたの？」

「いや、えっと……」

^A お母さんが、またぼくの一瞬の迷いに気づいたみたいだ。どうしよう。トクベツキューカを使って学校を休むのなら、登校時間の前に決めなければならぬ。

だけど、トクベツキューカを使っちゃったら、もう好きなきに休めなくなってしまうから……。

「急いでご飯食べて、急いで学校行く！」

早めに学校に行って、宿題をすることに決めた。

それならテストにも、じゅうぶん間に合う。

そして、トクベツキューカを使わずに済むのだ。

やっぱりまだ、トクベツキューカを使いたくない、という一心で、急いで準備をした。

(中略)

「鳥海くんは、トクベツキューカをどんなことに使うつもりなの？」

——十一月。

今日は西方先生との、ちょっとした面談の日だ。最近転校してきたぼくのためだけに、おこなってくれたのだ。

「今のところは、ちょっと決まっていなくて……」

「そうだよ、前の学校には、こんな校則なかっただろうし」

「はい、とりあえずはまだ、とっておこうと思っ……」

「うんうん、それでいいと思うよ。ほかの子は、結構使っちゃってる子も多いみたいだね。友だちと遊びに行く日に使ったり、家族旅行に行ったり、なんとなく休みたいからって使ったり」

「そうなんですね……」

ぼくは、最初から家族の行事や、友だちとの遊びに使うつもりはなかった。

あくまで前の学校のときみたいに、体調的にも気分的にも学校に行きたくないな、と思ったり、何か嫌なことがあったりする日が来るまで、とっておこうと決めていたのだ。

でも今はもう、冬も近づいている。残り四、五か月で学校自体終わりを迎えてしまうことになるのだ。

「そしたら今は、学校での悩みごととか何かあるかな？」

西方先生が、話を交える感じで言った。ぼくが前の学校で休みがちだったのは、お母さんから伝わっているのだろう。

ただ、そう言われても、すぐにぴんときなかつた。

「悩みごと……」

今のところ、体調的な心配は特にない。

自分としても、びっくりするくらい元気に過ごしていた。

「うーん……」

それに、クラスメイトとの問題も特になかった。とてもうまくいっているし、既に仲のいい友だちが何人かいた。

* 中谷くんとも、前よりもたくさん話すようになって、最近、中谷くんもよく笑うようになった。

「なんだろう……」

ほかに悩みごとってあるだろうか。

最近は宿題も欠かさずやっている。勉強だって学校を休んでいないから、授業にもちゃんとついていけている。成績は前よりも大分上がっていた。

「悩みごと……?」

「いや、無理に悩みごとを探さなくてもいいけどね!」

ずっと頭をひねり続けていたばかりに向かって、西方先生が言葉を続けた。

「悩みがないならいいで、すごくいいことだと思うよ。先生安心しちゃったなあ」

西方先生が嬉しそうに微笑んだので、ぼくもなんだか嬉しくなった。

気にかけてくれている人がいるというだけで、安心できたのだ。

「でもきつと、生活はすごく変わったよね。秋田と違って、だいぶ違うことも多いだろうし」

「そうですね、秋田ではけっこう田舎のほうに住んでいたの、近くにクマが出たりもしましたし……」

「クマ!? それはすごいね、千葉でクマなんて見かけたことないよ。わたしが見たことあるのはクマンバチくらい」

「クマンバチ……?」

ぼくがきよとした顔をしていると、西方先生が不思議そうな顔をした。C
「鳥海君、クマンバチ知らない? ハチの中ではすごく大きくて、クマみたいなでつかいハチのこと」

そこまで聞いて、気づいたことがあった。

「……もしかしてクマバチのことですか?」

「あつ」

今度は西方先生のほうが、何かに気づいたような顔をしたら。

「そういえばクマンバチって呼びかたは地域の方言って言ってたなあ。正式名称はクマバチだけど、関東はクマンバチって呼ぶことが多くて、他にも九州だとオオスズメバチのことを、クマンバチって呼んだりもすることもあるとも言っていたし……」

「はあ……」

言っていた、というのが誰のことを指しているのかわからないけれど、ぼくも初耳のことだった。

「まあ東北や秋田の中でも、クマバチとかクマンバチとか、色々言い方は分かれてるのかもね。わたしとしては、クマンバチって言うほうが、なんかかわいらしくていいけどなあ」

「かわいらしい……?」

クマバチをクマンバチと呼んだところで、かわいくならないで思えないが、西方先生は本気で思っているようだった。

そもそも、あのかい見た目を知っていたら、かわいいなんて思う要素は、一切ないと思うけど……。

「ねえ、そういえば鳥海君は、昔はクマンバチって、本当は飛べない虫と言われていたのを知ってる?」

「えっ?」

それがどういうことを意味しているのか、ぼくにはすぐにわからなかった。^D

「昔はあんなでっかい体に小さな羽でクマンバチが空を自由に飛んでるのって、科学的には考えられないことって言われていたんだって」

「そうだったんですか……」

知らなかった。でも言われてみるとわかる気もする。クマバチは、飛ぶには、あまりにもアンバランスな見た目をしているのだ。

西方先生は、指を一本立てて言葉を続ける。

「それでね、当時、クマンバチが飛べる理由として考えられた、あるお話がおもしろいのよ」

「あるお話……?」

ぼくが尋ねると、西方先生は、待っていましたというふうに、小さく笑ってから答えてくれた。

「飛べないことを知らないから、クマンバチは飛ぶことができる、って言われていたことがあったんだって」

「飛べないことを知らないから……」

「自分が同じハチの仲間で、自分だって飛べると思い込ん

でるから飛べるって、昔はそう言われていたんだって。おもしろいよね」

「飛べると思い込んでるから、飛べる……」

確かにおもしろかった。

いや、それ以上に驚きだった。

飛べないことを知らなくて、自分で思い込んでるから飛べるなんて——。

「まあ今は、本当の理由は科学的に解き明かされて、思い込みなんて関係ないってことがわかったんだけど、実際、そういう気持ちの部分って、とても大事なんだと思うな。自分のことをちゃんと信じていたら、できることってたくさんあるはずだから」

「信じていたら、できること……」

E そう言われて、気づいたことがあった。

ぼくは前の学校にいたときは、自分自身、体が弱くて学校を休むのが当たりまえだと思っていた。

だから、本当はもう少しがんばれば学校に行けるようなときも、なんか今日は無理だなんて、勝手に決めつけちゃって、かんたんに休んでいた。

でも今のぼくは、自分が元気だと思っている。

そして実際に、元気に毎日学校に来ている。

これも、トクベツキューカのおかげかもしれない。

いざというときに、とっておきのやつがある、と思うと、安心することができたのだ。

それから西方先生は、ある情報を付け足してくれた。

F 「クマンバチもこんな話を聞くとさ、かわいじやなくてかつこよく思えちゃうよね。そういえばクマンバチって、

見た目とは違って温厚な性格のミツバチの仲間らしいよ。オスにいたっては、針すら持っていないんだって」

「……西方先生、ハチに詳しいんですね」

「ううん、実はこれ全部、クラスの子に教えてもらったことなの。ほかにもミツバチの8の字ダンスのこととか教えてくれてね、トクベツキューカも、ミツバチの巣を探しに行くのに使っていたくらいだから」

「そうだったんですね……」

そういえば、クラスの中で、虫の図鑑ずかんを広げて読んでいた女の子がいた。一緒にいた女の子と、8の字を指で描かいていたこともあった。きっとそれが、ミツバチの8の字ダンスのことだったのかもしれない。

「うん。まだたくさん時間はあるし、クラスのいろんな子

と話してみてね。それぞれいいところがある子が、いっぱいいるから。……それじゃあ今日の面談はこれでおしまい。トクベツキューカも、いつでも使っているからね。もちろん、最後までとっておいてもいいし」

^G 西方先生には、ぼくの考えは見破られているようだった。

「それじゃあ気をつけて帰ってね、さよなら鳥海くん」

「はい、さよなら」

「また明日、学校でね」

教室を出て、廊下^{ろうか}を歩き始める。

それから一度立ち止まって窓の外空を見上げると、クマバチはいなかったけど、悠々^{ゆうゆう}と飛ぶ一羽の鳥がいた。

「……」

その姿を見つめてから、周りに誰もいないことを確認して、こっそり両手を広げてみる。

「ぼくは飛べる、ぼくは飛べる……」

一瞬、本気で心の中で思ってみたけど、全然体が浮き上がる気配はなかった。

「まあ無理だよな」

^H でも今は、なんだかとても気持ちがいい。

それだけで充分^{じゅうぶん}だった。

（清水晴木『トクベツキューカ、はじめました！』による）

【注】

* トクベツキューカ——浩の通っている学校には、一年に一日だけ、好きな日に好きな理由で学校を休める制度がある。

* 中谷くん——友人関係で落ち込んでいたクラスメイト。

問一 ―線部A「お母さんが、またぼくの一瞬の迷いに気づいたみたいだ」とあるが、「ぼく」はどのようなことを迷っていたのか。その内容として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア なんとなく気分が悪いので、トクベツキューカを使おうと思ったが、せっかく勉強した漢字のテストも受けない。
イ 宿題をどうにかしたいが、クラスメイトとまだ親しくないなので、誰に宿題についての質問をしたらいいかわからない。
ウ 宿題をやらずにとりあえず登校だけはした方がいいか、遅刻^{ちこく}してでも宿題を終わらせてから登校するべきなのか決められない。

エ 宿題をやっていないので、トクベツキューカを使って学校を休んでしまいたいけど、転校して間もないので、簡単に休みたくない。

問二 ―線部B「頭をひねり続けていた」とあるが、「頭をひねる」のここでの意味として正しいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 物事に悩んで落ち込むこと
イ 疑問に思っ^て首をかしげること
ウ あれこれと考えをめぐらせること
エ 考えるために大きく頭を振^ふること

問三 — 線部 C 「ぼくがきよとした顔をしていると、西方先生が不思議そうな顔をして言った」とあるが、この時の「ぼく」と「西方先生」は、なぜこのような顔をしているのか。それぞれ説明しなさい。

問四 — 線部 D 「ぼくにはすぐにわからなかった」とあるが、「ぼく」がわからなかったことは、どのようなことか。その内容として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大きな体のクマンバチが、小さな羽でも空を自由に飛び回れること。
イ クマンバチは飛んでいるのに、本当は飛べないと言われていたこと。
ウ 今は飛んでいるクマンバチが、昔は飛ぶことができなかったということ。
エ クマンバチの話と今の自分とに、どのような共通点があるのかということ。

問五 — 線部 E 「そう言われて、気づいたことがあった」とあるが、「ぼく」は過去の自分について、どのようなことに気づいたのか。説明しなさい。

問六 ——線部 F「クマンバチもこんな話を聞くとさ、かわいいじゃなくてかつこよく思えちゃうよね」とあるが、なぜ「かつこよく思え」るのか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア クマのように大きな体をしているのに、小さな羽で自由に飛ぶことができるから。

イ 科学的には飛べないはずなのに、努力の積み重ねによって、ついに飛ぶことを実現したから。

ウ 飛べる理由が解き明かされるまでは、自分を信じることで飛んでいると考えられていたから。

エ クマという名前が入っているが、温厚な性格のミツバチの仲間で、オスは針すら持っていないから。

問七 ——線部 G「西方先生には、ぼくの考えは見破られているようだった」とあるが、「ぼくの考え」とはどのようなものか。解答欄に合うように本文から五十五字以内で抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

問八 ——線部 H「でも今は、なんだかとっても気持ちがいい」とあるが、「ぼく」はなぜこのように思ったのか。その理由を七十五字以内で説明しなさい。